

### ■ 綱引きの復活



かつて旧暦6月15日あるいは25日に、宜野湾馬場で行われていた字宜野湾の綱引きは、日没後に一回勝負を行う。誰でも参加できる「語り綱」で、綱を高く持ち上げたままカヌチ棒で貫く。勝利した側の綱を担ぎ上げ馬場を蛇行する「民り綱」が特徴でした。

沖縄戦の混乱で途絶えましたが、2006(平成18)年3月、多くの区民が参加した創作市民劇「じのーん産泉」公演をきっかけに、復活の気運が高まり、準備に取り組みしました。翌年、真夏の日差しが照りつける中、区民総出で本綱作りが行われました。会場となる沖縄国際大学への通りには横断幕が掲げられ、各通里には看板や各班の「のぼり」が立ち並び、ムードを高めていきました。子ども会ではさまざまな形や彩りのチチンドゥール(鼓灯笼)が作られました。

綱引きは前村渠(雄綱)と後村渠(雌綱)に分かれて勝負します。当日は道ジュネーに始まり旗頭・ガーエー・モーモー、開会行事、綱引き、民り綱、コミュニケーションアシビ、カチャーシー等の全区民参加による伝統行事が続き、字宜野湾の綱引きを踏襲した「じのーん大綱引き」が復活しました。それからは5年毎に行われています。

**編集・発行 / 宜野湾市教育委員会文化課**  
〒901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1-1-2  
TEL.098-893-4430  
**編集協力 / 株式会社アートリンク**  
〒901-0146 沖縄県那覇市具志3-17-22  
TEL.098-894-5397  
印刷 /            
〒000-0000 沖縄県〇〇〇〇〇〇〇〇-00-00  
TEL.000-0000-0000

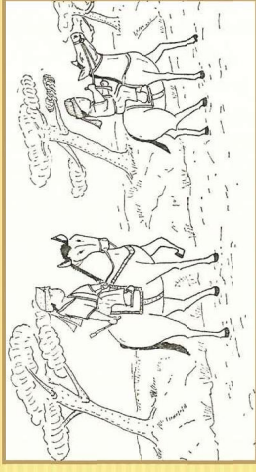
### ■ 馬勝負と宜野湾馬場

馬走らせ・馬揃いとも言われますが宜野湾では馬勝負と呼び、琉球王国時代から戦前まで行われました。沖縄の在来馬は小さくおとなしいので荷物の運搬や農耕に向いており、背中に乗せた積み荷を落とさないうように運べることも必要な技術でした。そういった事から琉球競馬では速さよりも優雅さが競われました。

勝負は2頭ずつ行われました。右前脚と右後脚、左前脚と左後脚を交互に動かす“剣対歩”という独特の走り方で、試合中に騎手の体が揺れないように走ります。そのリズムや馬の姿勢、人と馬との呼吸等、優雅さや美しさが競われました。中には一足とびに走ったり、方向をまちがえたり、横ばいや落馬もあり、笑いと拍手が起りました。2頭の間隔が空くと審判が旗をあげて勝敗が決まります。馬勝負の賞品は普通手拭でしたが、大きな大会では賞金も出ました。

戦前、駿足の名馬といえば、大謝名のスビ(屋号・姓は天久)の持ち馬ヒコキーが有名ですが、宜野湾村には他にサバグチ・マージラバ・マンガタミグワーなどの名馬がいました。

昭和初期まで馬場のあったところは、字宜野湾のみでした。中頭地域で名高い宜野湾馬場は宜野湾街道の近くにあり、そのコースは県内でも長い方で300mから400mほどだったそうです。馬の走るコースは古くは直線であったようですが、後世になって長方形の馬場を廻る競走になりました。



ウマスーブ 「宜野湾市史 第五巻 資料編 四 民俗」より転載

# 宜野湾歴史文化遺産マップ

### ■ 宜野湾について

宜野湾市の中央部、琉球石灰岩の台地上に位置し、石灰岩地帯の特徴である洞穴や湧泉が発達している地域です。

戦前までの宜野湾はジノードゥームラ(宜野湾同村)とも呼ばれ、宜野湾並松に沿って、その東側に広がる大きな集落でした。1671年、間切新設の際に間切番所が設置され、沖縄県となってから戦前まで村役場や中頭役所・学校・郵便局などの公共施設が置かれ行政の中心でした。ナンマチに並行してウマイー(馬追=馬場)があり、ここではマチグアウ(市場)が開かれ、にぎわいを見せ、普天間と並ぶ大きなマチでした。

戦後は集落を基地に吸収されたため、人々は集落南の地である薄倉原を中心に前田原・山川原に宅地を造成し住まざるをえませんでした。基地内には後の御嶽や産泉などが残り、字宜野湾郷友会が結成され自治会とともに、旧暦3月3日のサングアチヤーや旧暦7月のエイサー、舞方、旗頭演舞等の伝統行事を継承しています。2007(平成19)年には沖縄国際大学の運動場で66年ぶりに大綱引きが復活されました。

### ■ 戦前の字宜野湾集落イメージ図



■ 宜野湾市全域図



1943(昭和18)年頃の宜野湾村と現在の米軍基地

※沖縄県により一部加工しております。

# 宜野湾の歴史

宜野湾市の中央部に位置し、ジーンダウンラーム(宜野湾同村)とも呼ばれます。1671(寛政10)年、宜野湾間切が新設された際、間に間切番所が置かれました。



【間切図】沖縄県立博物館、美術館所蔵



【宜野湾村役場】



【ジーンダウンラーム】

1879(明治12)年の版籍調査により、沖縄県宜野湾村となりました。新たに村役場、小学校、郵便局が設けられ、村行政の中心地となりました。東西南北の道が交差し交通の要所でもあったことから、広く近隣村にまで及ぶ農産物の集散地でもありました。また、立派なウマイ(馬場)があり、ンマサーブ(馬勝負)が賑やかに催されました。ウマイに隣接して、マチチヤ(市場)があり、野菜やイモなどの食品が売られていました。マチチヤ(商店)、飲食店、酒屋・烏屋などがあり、普天間と並ぶ大きな集落でした。

集落西側にはジーンナンマチ(宜野湾並松街道)があり、美しい松並木がありました。松の落ち葉は、焚き付けに重宝したことから、子どもたちが拾っていたので、道は掃除をしたように綺麗であったようです。

集落はメーダングカリ(前村集)とワンダカリ(後村集)に分かれていて、チナヒチ(綱引き)はこれらの組分けで行われました。クシダカリの東側は、とくにワインダカリ(上村集)と呼ばれ、集落雑沓の地であるといわれています。



【宜野湾集落】メーダングカリ(前村集)より撮影

## 【宜野湾の行事】

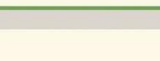
行事は全て旧暦により行われました。2月2日の慶徳い、3月3日の三月、6月25日の綱引き、7月十五夜のエイサー、8月10日のンマサーブは現在も継承されています。毛遊びも盛んで他の集落より長く、開戦直前まで行われてきました。語りには三縁に合わせ、空手の型を舞踊風に踊る舞方(高例)をつけました。現在は舞方の保存会があります。綱引きやお祭りの行事で継承されています。また、宜野湾が最も力を入れている祭りは綱引きで、2007(平成19)年7月29日に66年ぶりに復活されました。



【メーカタ】



【綱引き】



【サンゴワフチャー】

# 宜野湾の文化遺産



**1 ワシヌウタキ(後の御蔵)**  
普天間飛行場内にある場所です。破壊しましたが、ほぼ原形に修復しています。奇和旅を無事に終えた皇野湾王子から、送られた石灯籠も残っています。綱引きの御蔵と呼ばれる場所です。

**2 宜野湾メーヌカー古湧泉**  
メーヌカーは、ウブミジ(産水)としたので、ウブカー(産水)とも呼ばれます。手ヤシ(扇)の先相チヤシスヒヤヤーが通った泉と伝わり、戦前建立の石碑も残っています。

**3 はらから之塔**  
1968(昭和43)年1月に工事費28ドル74セントをかけて建立。塔名は「はらから」とは、お互いに回廊で兄弟姉妹という意味で、住民から公募しました。塔には、第二次世界大戦での宇野野島出身兵隊241柱の名前が刻銘されています。(伊集原)平和の願いを込めて353人と報告し、塔の管理は、1979(昭和54)年に、郷友会から毎年友会へと移管されました。郷友会では毎年7月に観音堂を行っています。

**4 ノロ殿内**  
ノロの神とムラ火の神、土地の守り神が安置されています。裏山(扇)が殿と一緒に管理しています。

**5 土帝君**  
石像(扇)の先祖が、中国から前漢にたどります。昭和初期に男神像、沖網敷で女神像が安置されましたが、1984(昭和59)年、新神像の運送祭を挙行しました。祭日は旧暦2月2日です。

**6 ウブカーのカーラー拝み**  
旧暦6月25日に行われた湧き水の清浄と、代表者による御願です。現在は25日以後の日曜日に行われます。御願は、同日カーラーを下げました。つばした牛の肉は、住民に配られました。

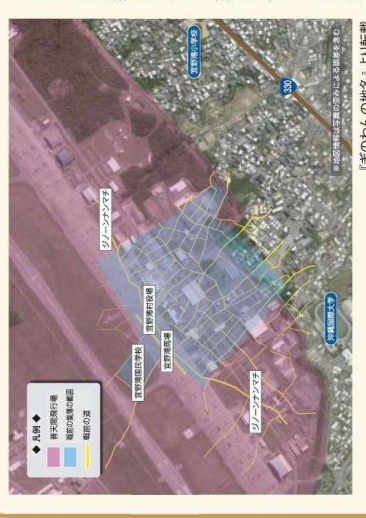
**7 シマワサフシ**  
★拝み場所 旧暦8月10日に、集落の入り口6か所で行われる祭神回遷の御願です。戦前までは、ヒシヤナー(左向きに集った餅)をばり、牛の肉を下げました。つばした牛の肉は、住民に配られました。

# 西暦 | 年号 | 出来事

- 1609 万曆37 薩摩侵攻
- 1644 順治元 尚賢王、普天間参詣を始める
- 1671 康熙10 宜野湾間切、新設(それまで宜野湾村は浦添間切)
- 1734 乾隆12 宜野湾村の津波、優れた親孝行により王府より表彰される
- 1737 乾隆正 乾隆大御支配(元文検地)はじまる
- 1791 同年の銃のある奇進灯籠一対がワシヌウタキにある
- 1803 嘉慶8 同年の銘のある奇進灯籠一対がワシヌウタキにある
- 1847 道光27 英国人医師ペッテルハイム、中城から宜野湾番所を経て那覇へ帰る
- 1872 明治5 明治政府が琉球王国を琉球藩とする
- 1879 明治12 琉球藩を廃して沖縄県設置
- 1881 明治14 中頭役所、美里間切から宜野湾村の宜野湾間切番所へ移転
- 1882 明治15 宜野湾小学校(のちの宜野湾尋常小学校、宜野湾村に開校)
- 1896 明治29 沖縄県下で郡区制を実施、宜野湾間切は中頭郡に所属
- 1900 明治33 宜野湾馬場で中頭郡内の名馬による競馬を開催
- 1902 明治35 普天間街道、開通式/宜野湾尋常小学校に高等科設置
- 1908 明治41 沖縄県及島嶼町村制、宜野湾間切は宜野湾村となり、宜野湾村は字(あざ)宜野湾となる
- 1916 大正5 この頃から旧習俗改善の可否をめぐるシルークル一闘争が始まる
- 1924 大正13 この頃から政治的対立をめぐるシルークル一闘争が始まる
- 1932 昭和7 「宜野湾街道ノ松並木」、国天然記念物に指定
- 1939 昭和14 第二次世界大戦、勃発
- 1941 昭和16 宜野湾尋常高等小学校、宜野湾国民学校となる
- 1944 昭和19 宜野湾国民学校の学童疎開者が「宮崎県へ出発
- 1945 昭和20 米軍、宜野湾周辺まで進攻(4/4)/普天間飛行場の建設開始(6月)
- 1948 昭和23 野南初等学校が宜野湾初等学校となる(4月)/7(1)ヒナ一事件(8月) 宜野湾村に行政区を設置、宇宜野湾は宜野湾区となる(10月)
- 1949 昭和24 宜野湾劇場、開場(4年後に閉鎖)
- 1951 昭和26 宜野湾小学校となる
- 1953 昭和28 宇宜野湾闘牛組合、結成
- 1957 昭和33 区立幼稚園、開園(4月)/公民館落成祝賀会(12月)
- 1960 昭和35 区民所有の畑に米軍へ埋立(1月)
- 1961 昭和36 高等弁務官資金でメーヌカーに簡易水道施設を設置(6月)
- 1962 昭和37 宜野湾市誕生
- 1963 昭和38 普天間飛行場にフェンス設置
- 1968 昭和43 慰霊碑「はらから之塔」建立(1月)/上水道の給水開始(2月)
- 1970 昭和45 燃焼燃料作地の出入口が閉鎖される
- 1972 昭和47 本土復帰/沖縄国際大学、開学/ 沖縄国際大学の建設現場に米軍機の燃料タンク落下
- 1978 昭和53 宇宜野湾婦人会、設立
- 1979 昭和54 宜野湾区公民館、竣工
- 1982 昭和57 志真志小学校、開校(4月)
- 1984 昭和59 土帝君を整備、遷座祭を挙行
- 1988 昭和63 「ぎのわん 宇宜野湾郷友会誌」発刊
- 1989 平成元 「はらから之塔」銘板修復工事完了
- 2000 平成12 こども会、結成
- 2001 平成13 マーケット広場の整備工事完了
- 2004 平成16 沖縄国際大学に米軍へ埋立
- 2006 平成18 猿頭入瑞式/創作市民劇「ヒの一人産泉」上演
- 2007 平成19 大綱引き、66年ぶりに復活
- 2009 平成21 「写真集 じの一人とウーむら」発刊
- 2011 平成23 宜野湾小学校附設130周年記念式典
- 2014 平成26 「宇宜野湾の年中祭肥」市登録無形民俗文化財に登録
- 2020 令和 宜野湾市、人口10万人を超える

## 【宜野湾の戦後から今】

沖縄戦が南部で燃焼を極めていた1945(昭和20)年6月、アメリカ軍により集落の大半が破壊され、普天間飛行場の敷地として接収されました。1947(昭和22)年、宜野湾の人口に居住許可が下りました。しかし、飛行場敷地内に屋敷のあった人びとは、帰る事ができませんでした。戦争は終戦しましたが、1948(昭和23)年8月、拉致目的で真珠湾に侵入したフィリピン人により住民が殺害される悲しい事件がありました。宇では、自衛団を結成して24時間体制で警備を行っていたという歴史もあります。かつての農地は、住宅地に姿を変えて市街化が進んでいます。故郷が、ほとんどの土地が飛行場内にあり、住民の希望である「故郷」に帰ることが叶っていません。



「ぎのわん」の地名、より撮影